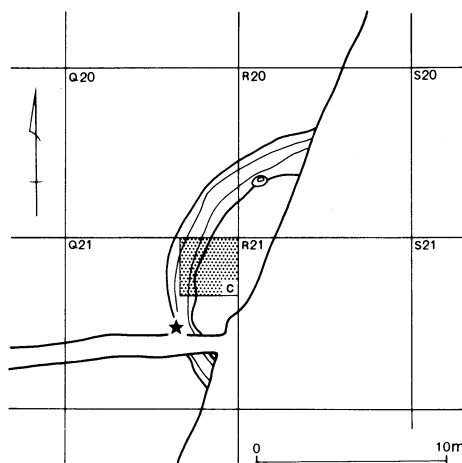


2. 代正寺遺跡出土の形象埴輪について

代正寺遺跡の調査では合計16基の古墳跡が検出され、第1・9・15号古墳跡の3基に埴輪の樹立が確認された。そのうちの第9・15号古墳跡からは人物、馬、器財形埴輪などの多くの形象埴輪が出土し、6世紀前半における小規模円墳の埴輪祭式の実態が明らかにされている。

1. 第9号古墳跡出土の形象埴輪

第9号古墳跡からは西側周溝を中心に女子人物埴輪、胸繫に鈴をつけた馬形埴輪などが出土している（第1図）。形象埴輪の樹立状況については部分的な調査のため全容は不明であるが、西側周溝部分を中心に女子、飾り馬などが限定的に配置されていた可能性が高い。また出土位置が明らかでない点が惜しまれるが、攪乱土中に一括して廃棄された女子人物埴輪の半身像がほぼ完形に復元されている。この女子人物埴輪は顔面に赤彩を塗布し、巫女特有の祭服である意須比を身に纏い、壺を捧げ持った姿態を表現していることから巫女を表した女子像と推定される。頭部や指などの表現が写実的であり、淡褐色に焼き上げられた色調などの特徴から人物埴輪としては初期の作風を残す優品である。



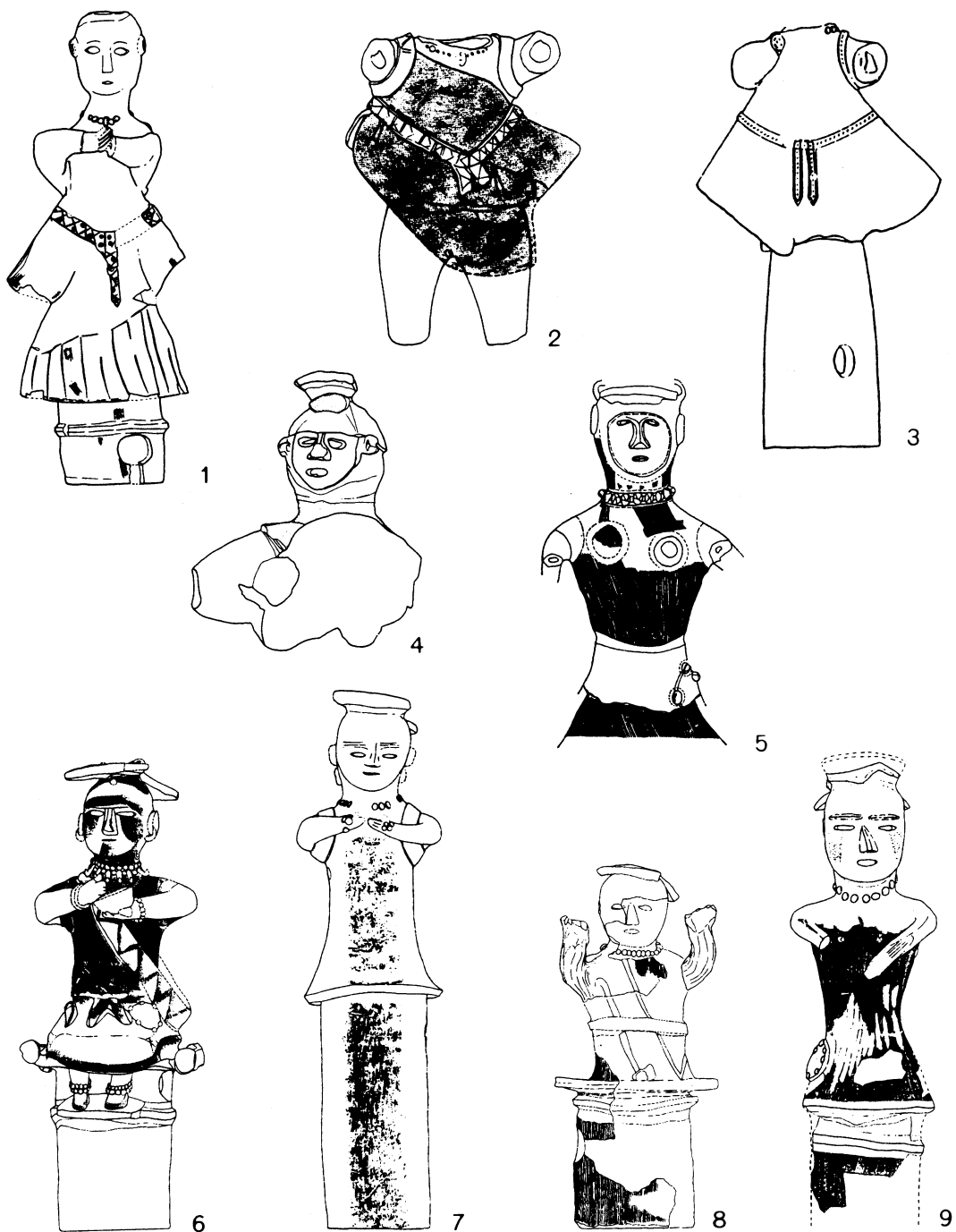
第1図 第9号古墳跡形象埴輪分布図
(★印は巫女埴輪出土地点)

両手を前方に差し出し、酒を入れた壺や甕を捧げ持つ姿態を表した女子像は、宮城県台町103号墳（今津1988）、茨城県不二内古墳（斎藤・川上1974）、静岡県郷ヶ平6号墳（鈴木1985）などで出土しており、祭宴に参加した人々に酒を振る舞う巫女や内膳の女子を表した普遍的な表現である。巫女埴輪の最古例のひとつとされる5世紀後葉の大阪府蕃上山古墳からは、意須比を身に纏い褌掛けし腰に緩く腰帯を巻いた巫女像が4体出土している（野上1982）。いずれも両腕を欠失しているが基部の状況から両腕を前方に上げ壺などを捧げ持つ姿態を表現していたものと考えられている。また褌掛けをした男現と推定される男子像が共伴していることから人物埴輪出現期から巫女や男現などの祭人埴輪が埴輪祭式の中で重要な役割を担っていたことが推測される。TK47型式の須恵器を出土した京都府塩谷5号墳では墳丘裾部を巡る円筒埴輪列以外、わずか2体の巫女埴輪が樹立されていただけで、形象埴輪を少数樹立する小規模古墳の場合、最小単位の人物埴輪の配置が巫女像に限られていたことを示す好例である（伊野1990）。さらに畿内における埴輪樹立古墳の中で最も新しく位置づけられる6世紀中葉の奈良県勢野茶臼山古墳から出土した女子像も意須比を纏った巫女を表しており、畿内では人物埴輪の出現から消滅に至るまで巫女埴輪は一貫した衣服や動作を一つの類型として厳格に順守していたことが指摘されている（伊達1966）。これは家、蓋、盾などの器財形埴輪を中心に盛行した畿内の埴輪文化の中で人物埴輪出現以降、巫女などの祭人埴輪が中核的な存在であったことを示唆している。

東国においても畿内での人物埴輪出現以後、わずかに遅れた5世紀後葉の福島県天王壇古墳から腕の表現のない意須比をつけた巫女と共に樽形埴輪が共伴しており、初期の巫女埴輪の実態が明らかにされている(山崎1984)。5世紀末葉の宮城県台町103号墳からは、甕を捧げ持つ女子像が典型的巫女の姿態として逸速く登場している。また関東でも初期人物埴輪を出土した埼玉県埼玉稲荷山古墳から鈴鏡を腰に吊した巫女(斎藤・柳田1980)、群馬県保渡田八幡塚古墳から二重の頸飾りをつけ意須比を纏い前方に手を上げた巫女が出土している(福島1932)。つづく6世紀前半代の群馬県塚廻り3号墳からは椅子に腰掛けた巫女像が、同じく塚廻り4号墳からは意須比を身に纏い右手に頭椎大刀を持つ巫女像と甕を捧げ持った女子像が出土しており、首長権継承儀礼である誂と饗宴を表現したものと復元されている(橋本1980)。6世紀後葉に築造された円墳の群馬県富岡5号墳では、横穴式石室開口部右側に巫女4、武人2、農夫1、馬1が列状に配置され、巫女像は襷掛けをした御食持ちの女子として表現されている(外山1972)。また6世紀後葉の前方後円墳、群馬県綿貫観音山古墳では横穴式石室の開口部に正座する巫女と、これに対向して胡座する貴人が配置され、巫女の後には御食持ちの女子が続く。さらにこの二人の中心人物を見守るように「三人童女」と呼ばれる稚児巫女が置かれ、殯宮における首長権継承儀礼の場を表現したものと推定されている(若松1988)。このように6世紀代に人物埴輪を中心に爆発的に隆盛した東国の埴輪文化の中で巫女埴輪は、殯の場における「神人共食の儀礼」を表示する重要な役割を演じ、形象された人物の社会的地位や職掌によってさまざまな祭服や祭具を身に纏い、それぞれ多様な姿態を表現している。その多くが「静」的な表現を示す畿内の巫女像とは異なり、東国の巫女像は「動」的な表現を示すものが多いことが大きな特徴と言える(註1)。

次に県内における巫女埴輪の出土例としては、5世紀末葉の埼玉稲荷山古墳から出土した鈴鏡を腰に下げた巫女が初現例と考えられる(註2)。6世紀代の例としては東松山市三千塚古墳群から出土した椅子に座り、袋状の意須比を身に纏い、腰に鈴鏡と通常の形の鏡を左右に下げた巫女の椅座像がある(若松1988)。同じく東松山市古凍根岸裏7号古墳跡からは円盤状の台部の上に両手を高く前方に持ち上げ、意須比を身に纏った巫女像が出土している(村田1984)。また岡部町白山12号墳からは甕を捧げ持ち襷掛けした巫女(さきたま資料館1990)、鴻巣市生出塚埴輪窯跡群からは鈴鏡を腰に下げ、両手を胸前においた巫女(鴻巣市1989)などが出土している。

これらのうち埼玉稲荷山古墳、三千塚古墳群、生出塚埴輪窯跡群出土例の3例に鈴鏡を腰に下げた表現がみられ注目される。同じ様に鈴鏡を腰に下げた表現は福島県神谷作101号墳出土の盛装女子像(今津1988)、群馬県塚廻り3号墳の甕を持ち椅子に座る巫女像、群馬県古海出土の巫女椅座像(後藤1942)などが知られており、巫女の中でも中心的役割を果たす高貴な女性を表現したものが多い。鈴鏡は縁に付けられた鈴が楽器の役割を果たすことから、神祀りや舞いを職掌とする関東の巫女達に重用されていたのではないかと指摘されており(若松1988)、意須比などの祭服と同様に巫女を象徴的に表した祭具として意識され、死者の魂振りのために用いられたのであろう。他に東京国立博物館所蔵の深谷市上増田字西浦759出土品と東松山市柏崎字名所352出土品の中に巫女埴輪の破片が存在している(東京国立博物館1986)。前者は胸の前に両腕を上げて何かを捧げ持つ姿態をとる女子人物埴輪である。後者は甕を捧げ持った手の破片である。また意須比を纏った女子像



第2図 巫女埴輪 (縮尺約1/10)

1 塩谷5号墳(京都)、2 野畑出土(大阪)、3 勢野茶臼山古墳(奈良)、4 天王壇古墳(福島)、5 稻荷山古墳(埼玉)、6 塚廻り3号墳(群馬)、7 富岡5号墳(群馬)、8 古凍根岸裏7号古墳跡(埼玉)、9 生出塚埴輪窯跡群(埼玉)

が菖蒲町栢間古墳群（塩野1977）、江南町野原古墳群（亀井1977）から出土している。

以上の検討から第9号古墳跡に示された埴輪祭式の性格は、壺を捧げ持つ女子人物埴輪が葬儀に参列した人々の穢れを払うために酒を奉仕する巫女を表現したものと考えられることから殯における祭宴の場面を象徴的に表したものと推定される。このような6世紀前半代の小規模円墳における人物埴輪を中心とした埴輪祭式の類例としては、近隣に位置する古凍根岸裏7号古墳跡でも確認されている。東側周溝の限定された範囲から巫女、女子、帽子を被る男子などの人物埴輪が出土しており、埴輪祭式の共通性が窺われる。なお、第9号古墳跡の築造時期については、共伴した円筒埴輪の検討から6世紀第2四半期前半に位置づけられる。

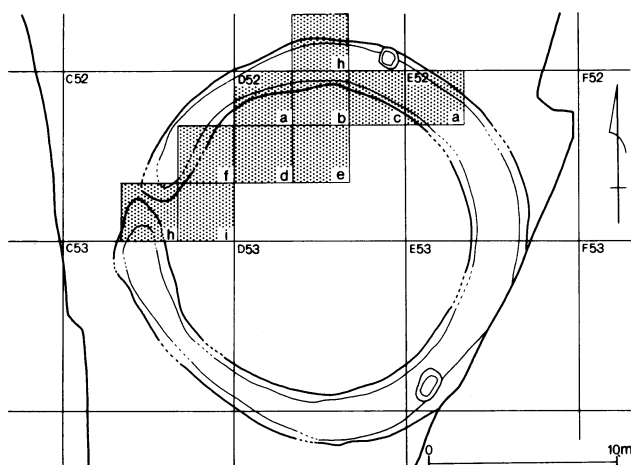
2. 第15号古墳跡出土の形象埴輪

第15号古墳跡は南東側周溝の一部が調査区域外にかかっている他はほぼ完掘され、西側周溝にブリッジ部をもつ墳丘径約17mの円墳であることが判明した。既に墳丘部分が削平されてしまっているため埋葬主体部の内容については不明である。埴輪の配列についても原位置をとどめるものが全くなく、ほとんどのものが周溝の覆土中に流れ込んだ状態で検出されている。

円筒埴輪は周溝の各所から出土しているが、その大半は西側のブリッジ部から北側周溝にかけて集中して出土している。全体に遺存状態が良好でないため断定はできないが、円筒埴輪列の樹立間隔に粗密が存在していた蓋然性が高い。おそらく北半部には密に、南半部にはややまばらに円筒埴輪が樹立されていたものと推定される。このような円筒埴輪列の樹立間隔の粗密は、ほぼ原位置の状態で円筒埴輪列が検出された6世紀末の行田市酒巻14号墳でも確認されている（中島1988）。

形象埴輪は第3図に示したように西側周溝ブリッジ部から北東側周溝部分の限定された範囲内から出土した。しかし、円筒埴輪同様、周溝の覆土内から出土した破片が多く、原位置を示すものは全くなかった。また表土内や重複する溝跡から出土し、本来の樹立位置から二次的に大きく移動したものも含まれている。このように樹立位置を特定できるものがなく、必ずしも良好な資料とはいえないが、ここでは小破片であっても形象埴輪の種類や個体の復元可能なものを積極的に取り上げて形象埴輪の配置について復元を試みたい。

まず、3×3mの小グリッドごとに出土した形象埴輪の概要について説明する。ブリッジ部付近のC-52-hグリッドからは器財形埴輪の鰭部(18)、C-52-iグリッドからは馬形埴輪の脚部(30)が出土している。ブリッジ部北側のC-52-fグリッドからは人物埴輪の左腕(7)、女子人物埴輪の髻の元結(3)が出土している。墳丘北側のD-52-dグリッドか

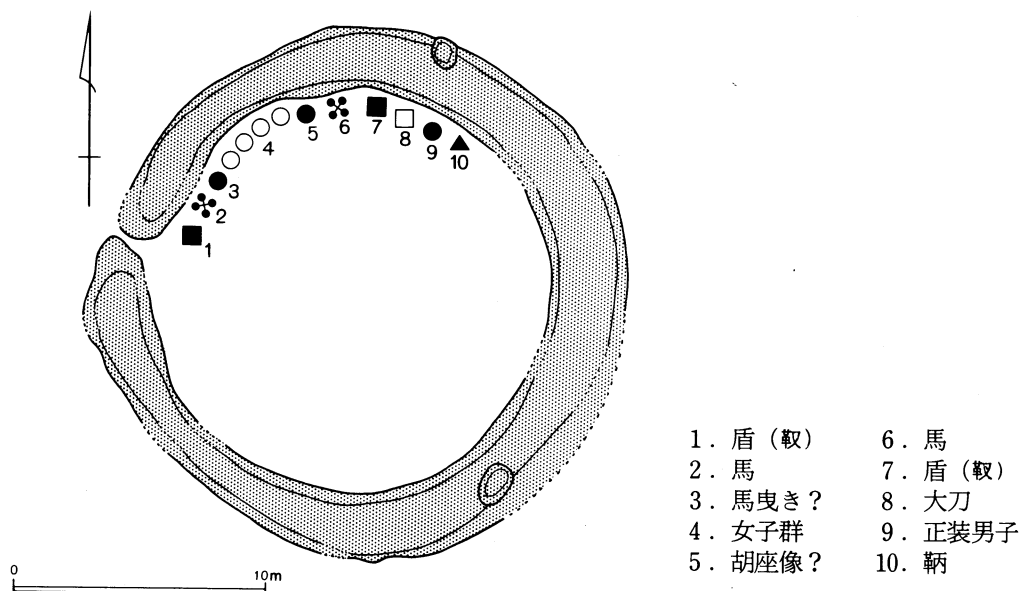


第3図 第15号古墳跡形象埴輪分布図

らは人物埴輪の頸部（6）、腕部（8）、胴部（9）、小型人物埴輪の左手（10）が出土し、他に大刀形埴輪の勾金（15）がある。D-52-eグリッドでは人物埴輪の鼻（5）、大刀形埴輪の勾金（14）、器財形埴輪の鰭部（17）が出土している。北西側周溝のD-52-aグリッドでは女子人物埴輪の髻（1）、小型人物埴輪の足（11・12）が出土し、北側周溝のD-52-bグリッドからは女子人物埴輪の髻元結（2）、器財形埴輪の鰭部（16）、他に馬形埴輪の立髪（26）、脚部（31）、馬鈴（32～37）がまとまって出土した。さらに北東側周溝のD-52-cグリッドからは人物埴輪に付属する頭椎大刀（13）と鞍形埴輪（38）が出土し、鞍形埴輪の一部はE-52-aグリッドにも広がっていた。この他に表土内から男子人物埴輪の美豆良（4）、馬形埴輪（25・27～29）などが出土している。（第1分冊 第237～239図 参照）

これらがある程度出土位置の特定できたものである。いずれも断片的であり、本来樹立されていた位置、順序、構成、個体数などを復元することは難しい。しかし、原位置の分かるような良好な状態で検出される場合は稀であり、今後の方法論的な課題の一つとして原位置を離れて出土した破片資料を埴輪祭式復元のためにどのように活用していくかが重要な課題であると思われる（註3）。十分な資料操作とは言えないが、出土位置をもとにして形象埴輪の樹立位置を推定復元したものが第4図である。

出土した形象埴輪には人物、馬、大刀、鞍等が認められ、小規模な円墳としては数量、種類ともに比較的豊富な内容を提示している。ブリッジ部から出土した器財形埴輪（18）は、盾あるいは鞍と推定される鰭部の破片である。これは防禦・防衛の機能を象徴化した武器・武具をブリッジ部に配置し、僻邪的な性格を表示したものと想定される。隣接する位置からは馬形埴輪の脚部片（30）が出土している。周囲から脚部以外の破片は出土していないが、この位置に馬形埴輪の配置を想定



第4図 第15号古墳跡形象埴輪配置推定復元図

しておきたい。また付近からは腕を前方に上げた姿態を示す人物埴輪の胴部片（9）が出土していることから「馬曳き」が伴っていた可能性も考えられるが、断片的であり判然としない。

北西側周溝から北側周溝にかけて人物埴輪がまとまって出土した。確認された髻の数からみて女子像が少なくとも3～4体樹立されていたものと復元される。いずれも小破片のため人物の性格を示唆するような装身具、衣服、姿態などの判明するものは少ない。丸玉を二重につけた頸飾りを表現する頸部の破片（6）がみられ、その中に高貴な女性が含まれていたことが分かるほどである。注目されるものとしては小型の人物埴輪の手足の破片（10～12）が出土している。接合部分がないため明確ではないが、胎土、色調、整形などの特徴から同一個体の可能性の強いものである。どのような所作を表現したものかは明らかではないが、足の表現などは埼玉古墳群の瓦塚古墳から出土した弾琴座像に類似していることから（若松1986）、胡座像あるいは椅子に腰掛けた人物（中心的な人物か？）を表現していたものと想定される。これらの人物群がどのような配置構成をとっていたかは推測の域を出ないが、埴輪祭式の中で主要な場面を表現していたことは間違いないであろう。おそらく埴輪祭式の中で普遍的な祭宴の場面を表現していたのかも知れない。

この人物群の東側からは馬鈴を付けた飾り馬の破片（26・31～37）がまとまって出土しており、馬形埴輪の存在が考えられる。飾り馬の存在は儀式的荘厳化と言った装飾的な効果を目的としたものと考えられる。その周囲からは盾あるいは鞆と推定される器財形埴輪（16）、大刀形埴輪の勾金破片（14・15）など防禦・防衛の機能を象徴する武器・武具が出土している。このうち大刀形埴輪は三輪玉を装着した玉纏大刀を模したものと想定される。実物の玉纏大刀は、実用性が低く儀仗刀として位置づけられていることからみて守護の性格の他に威儀具としての性格を兼ね備えていたものと推定される。また、これらの器財形埴輪に混じって人物埴輪に付属する頭椎大刀の破片（13）が出土している。この破片から大刀を佩用した正装男子像の存在が推定されるが、単体で樹立されていたのか、人物群を構成していたものであったのかは明確ではない。さらに、その東側には柄形埴輪（38）が樹立されていたことが出土状況から復元される。

以上、出土位置のある程度特定できたものを中心に配置と性格について復元を試みた。しかし、限定された資料のため本来の樹立位置、樹立順序、個体数などに関しては明確ではなく、必ずしもその全容を明らかにし得たとは言い難い（註4）。形象埴輪配置の全体的な傾向としては、墳丘の北側に配置された複数の女子像と椅座像等からなる人物埴輪群を中心として、その両側に盾、鞆、大刀、柄などの器財形埴輪と馬形埴輪が樹立された状況を想定することができる。

次に、出土した形象埴輪の形態、製作技法等を中心に類例との比較検討を行い、時期的な位置づけについて検討する。

人物埴輪については全容のわかるものではなく、わずかに女子人物埴輪の髻部、男子人物埴輪の美豆良、腕、足などの破片が数点確認されているに過ぎない。このうち腕や足の破片の断面部は、中空に形作られており、時期的な位置づけの検討材料となる。このような人物埴輪の腕にみられる中空式の製作技法は、若松良一氏の検討によれば棒状工具を利用して製作されたもので「木芯中空技法」と名づけられている（若松1986）。また中空式の製作技法は人物埴輪の初現期から6世紀の前葉頃まで存在した技法であり、中実式の製作技法は6世紀中葉頃、新たに生まれた技法であると指摘

している。従って本古墳例も人物埴輪の製作技法としては古い要素をとどめるものと言えよう。

大刀形埴輪は三輪玉をつけた勾金の破片が2点出土ただけで把、鞘などの形態は不明である。三輪玉は勾金に対して直交して装着されたもので両耳部分を欠損している。剝離痕の観察から三つの粘土塊を貼り付けて製作されたもので、両耳部分と中央のくびれが明瞭であり比較的実物を忠実に模したものと想定される。

飯塚武司氏によれば関東の大刀形埴輪は、畿内より若干遅れた6世紀初頭に三輪玉を装着した玉纏大刀を忠実に模したものとして出現し、埴輪消滅期の7世紀初頭までその形を踏襲していることが大きな特徴であると指摘されている(飯塚1981)。また坂 靖氏は畿内地方では4世紀末の奈良県東大寺山古墳、5世紀中葉の大阪府大賀世2号墳から大刀形埴輪が出土しているが、東国で隆盛するいわゆる「消火器形」埴輪とは形態的に異なり、直接的な祖形になったとは考えられないことから、それらより後出する5世紀後葉の大阪府茶山1号墳出土の三輪玉を勾金に装着した大刀形埴輪や和歌山県天神山古墳、奈良県橿本高塚谷出土の三輪玉を装着した勾金の破片などが東国で盛行した玉纏大刀形埴輪の祖形になったと指摘している(坂1988)。

県内では、6世紀後半に築造された前方後円墳の行田市酒巻15号墳から三輪玉を勾金に装着した玉纏大刀を忠実に模した大刀形埴輪が出土している。横穴式石室開口部の東側に靱・柄などの器形埴輪と共にまとまって樹立されていた(中島1989)。6世紀末に位置づけられる円墳の花園町黒田17号墳の墳頂部から出土した大刀形埴輪は勾金部に三つの円形の粘土粒を貼り付けた形骸化した三輪玉の表現がみられる。同様に勾金に円形の粘土粒を二つ貼り付けて形骸化した三輪玉あるいは丸玉を表現をした例が熊谷市三ヶ尻林4号墳から出土している。鴻巣市生田塚埴輪窯跡群、東松山市桜山埴輪窯跡群、嵐山町屋田5号墳などからは勾金に楕円形の粘土塊を縦位に貼り付けた飾玉の表現をもつ例が知られている。他に6世紀末の美里町塚本山1号墳から勾金に三輪玉の様に中央の大きな鈴の両脇に小さな鈴を付けた破片が出土しており注目される。三輪玉と鈴を折衷した形の静岡県飯塚古墳出土の銅製鈴付き三輪玉との関連性が窺われる。

このように本墳出土の大刀形埴輪は三輪玉を勾金に装着した玉纏大刀を表現したものと理解され、三輪玉の形態は実物を比較的忠実に表していることから古相を示すものと位置づけられる。

馬形埴輪は完形に復元されるものがなく、ほとんどが部分の破片である。頭部、胴部(鞍)、脚部、馬鈴などが出土している。個々の製作技法の詳細は事実報告に譲り、特に頭部と脚部の製作技法について説明する。

頭部製作技法の分かる25は、頸部と口先端部を欠損しているため頸部との接合関係及び口先端部の状態など頭部製作技法の分析視点として重要な部分の成形が不明である。頭部は粘土紐の積み上げによって先細りの円筒部を形作り、頬骨は粘土板を貼り付けて表現したもので内面に粘土紐痕が明瞭に残る。頭部の横断面形は扁平な隅丸台形に近いものと推定される。また目の上の膨らみなども写実的な表現である。脚部の製作技法は、円筒埴輪と同様に幅3～4cmの粘土帯を円筒状にして基部を作り、その上に粘土紐を巻き上げて成形された「粘土紐巻き上げ成形」である(註5)。

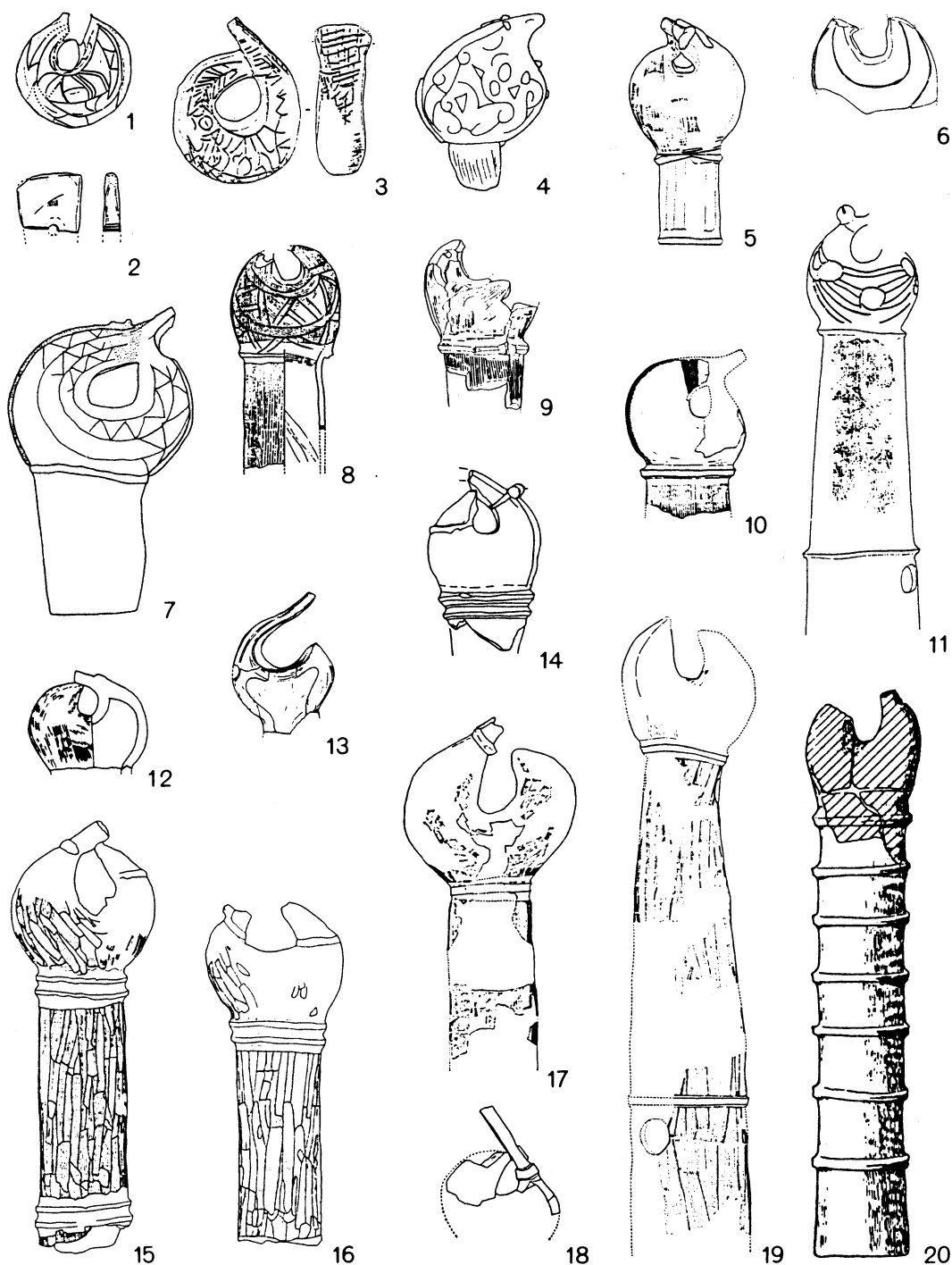
次に、馬装について検討する。25の頭部に装着された鏡板は、長楕円形の下端を弧形にくり込んだ空豆形をした楕円形鏡板付轡である。周縁に円形の粘土粒を貼り付けて鋳留を表現し、赤彩を施

す。この鏡板は、実物の馬具との検討から鉄板を切り抜いて作られた鉄製楕円形鏡板付轡を表現した可能性が強いものと思われる。鉄製楕円形鏡板付轡は、比較的簡素な造りから環状鏡板付轡成立以前の実用的な轡として半島から伝播し、5世紀末から6世紀前半にかけて盛行したものと考えられている。初現期の大阪府長持山古墳のような鉄地金銅張製のものはあまりなく、鉄板を切り抜いただけの比較的簡素な造りのものが多いのが特徴で、全国で40例ほどの類例が知られている（鹿野1987）。関 義則・宮代英一両氏の集成によれば県内で鉄製楕円形鏡板付轡を出土した古墳は、行田市大稻荷2号墳、川越市 どうまん 塚古墳・下小坂3号墳、東松山市諏訪山1号墳、朝霞市一夜塚古墳、児玉町長沖古墳群の6例が知られている（関・宮代1987）。全国的にみても奈良県、宮崎県、長野県などと並んで卓越した出土数を誇り、初期の実用的な馬具の配布を巡って特別な政治状況が想定されている。個体ごとの形態差が著しいことが特徴のひとつとも言われており、型式学的な変遷は明確にされていないが、終末段階（MT15～TK10型式段階）になると奈良県忍坂4号墳出土例にみられるような鏡板の大型化、周辺に鉄鉋打ちした製品が出現し、実用性から離れた装飾的な馬具に変化すると指摘されている。このことから本古墳から出土した馬形埴輪は、楕円形鏡板付轡の終末段階の特徴を模したものと位置づけておきたい。また北武蔵地域の埴輪生産の展開を検討した飯塚武司氏の編年案では、北武蔵第Ⅲ期2段階とした6世紀第2四半期前半にはf字形鏡板と鉋留め表現する円形ないし楕円形の鏡板を装着した馬形埴輪が一般的であるが、3段階になるとf字形や鉋留め表現をする鏡板に素環の鏡板が新しく加わり、前二者は3段階で消滅し、4段階からは素環の鏡板のみの表現になるとしている。なお、3段階の実年代を6世紀第2四半期後半～6世紀第3四半期前半に比定している（飯塚1984）。このように本古墳例は飯塚氏の北武蔵第Ⅲ期3段階に概ね相当するものと思われる。

面繫の辻金具については、方形金具を四方に配した組み合わせ式十字形板状辻金具を額革に付けたものがある。同様の辻金具の表現は桜山4号窯跡出土の馬形埴輪（水村1982）にもみられ、埴輪の需給関係を探る手掛かりとなる。他には円形の飾り鉋を表現したものがある。

鞍に関しては全体の形状の判明する資料はないが、後輪垂直鞍を付けた胴から尻にかけての破片が出土している。この鞍には居木の表現はみられず、布ナデを施しただけで鍔釦の一部が残存する。後輪は櫛形を呈し、周縁部には赤彩が施され、尻繫は後輪から直接延びて鈴杏葉を装着する。鈴杏葉の本体部分は剣菱形とならず舌状の粘土紐に鈴を貼り付けた簡略化された五鈴杏葉を表現したものである。他には胸繫などに付けられた馬鈴が出土している。

最後に**靱形埴輪**の時期的な位置づけについて類例を踏まえて検討しておきたい。靱は半月形の袋状に作った革製品の内部に獣毛をつめたもので、弓をひく人の左の手頸にむすびつけ、矢をはなったさいの弦の衝撃をふせぐために用いた弓具と言われている（小林1959）。実物としては正倉院御物の中に鹿革製黒漆塗りの靱が今に伝えられている。靱形埴輪に関する研究は、明治年間の八木契三郎氏の報告（八木1895・1899）、昭和初期の相川龍雄氏の研究（相川1931）などが代表的なものであるが、以後の研究はやや停滞し、個別に出土例が報告されているに過ぎなかった。近年、形象埴輪の編年の研究の機運の盛り上がりにより他の器財形埴輪との関連（高橋1988）や形態分類（坂1988）について検討が行われている。



第5図 軛形埴輪 (縮尺約1/10)

1・2 長瀬高浜遺跡 (鳥取)、3 背見山古墳 (和歌山)、4 恵下古墳 (群馬)、5 高山1号古墳 (群馬)、6 絹4号墳 (栃木)、7 千ヶ窪古墳 (栃木)、8 箱崎古墳群 (埼玉)、9 お釉塚古墳 (千葉)、10 稻荷2号墳 (栃木)、11 富岡5号墳 (群馬)、12 五箇古墳 (栃木)、13 境林古墳 (栃木)、14 西原F-1号墳 (群馬)、15・16 酒巻15号墳 (埼玉)、17~19 生出塚埴輪窯跡群 (埼玉)、20 織姫神社境内古墳 (栃木)

管見に触れた軀形埴輪の出土例は全国で50例ほどが知られる。初現期の4世紀末から5世紀代にかけては主に畿内周辺から出土しているが、6世紀以降は東国を中心に出土例が知られ、その大半が群馬県(13例)、栃木県(10例)、埼玉県(9例)の北関東地方に集中して分布している。

従前の研究では4世紀末葉の三重県石山古墳から出土した軀形埴輪が最古例として位置づけられているが、正式報告がないため詳細については不明である。後続する5世紀中葉前後の例としては鳥取県長瀬高浜遺跡(福嶋1982)、京都府鳴谷東1号墳(京都府1990)、静岡県堂山古墳(静岡大学1989)などが知られる。いずれも軀部に複雑な幾何学文様を線刻している。長瀬高浜遺跡例は円筒部の付かない軀本体のみを表現した中実式のもので、軀手部分に円孔をもち片面にのみ文様が描かれている。全体に平面的に作られていることから樹てるのではなく直接置かれたものと推定されている(土井・根鈴1987)。他の2例は短い円筒部の付いた中空式のもので、堂山古墳例は直弧文を線刻したものとして著名である。また畿内周辺における最も新しい時期の例としては、6世紀初頭の和歌山県背見山古墳から出土した格子目文及び直弧文を思わせる幾何学文を線刻した円筒部の付かない形態のものがある(大野・大野1978)。

東国では6世紀初頭の群馬県恵下古墳から出土した短い円筒部の付く環状のものが初現期の例である(梅澤1981)。幾何学文を線刻し、背部に鈴を付け、縫い合わせ目の表現がみられる。つづく6世紀第2四半期の例として群馬県高山1号古墳(中沢1987)、栃木県千ヶ窪古墳(埴・屋代1967)、埼玉県弁天塚古墳(金井塚1976)、千葉県お稲塚古墳(野中・溝口1979)など短い円筒部の付く形態のものが出土している。このうち千ヶ窪古墳例は三角文を線刻し、背部に突帯による縫い合わせ目の表現がみられる。6世紀第3四半期から6世紀末にかけて出土例が増加し、埼玉県広木大町古墳群のように一古墳群で最多の10個体の出土が確認されたものもある(小淵1980)。長大化した円筒部の付く形態が主体を占めている。軀部に複雑な線刻文や彩色などを施す例は少なくなり、簡略化した文様を表現するものが多くなる。代表的なものとして背部及び軀手に黒色の彩色を施した栃木県稲荷2号墳例(梁木1985)、背部に二条線を線刻し、縫い合わせ目を表現した群馬県西原F-1号墳例(小島1985)及び埼玉県酒巻15号墳例(中島1989)、円文を弧線で繋ぎ軀手に鈴を付けた群馬県富岡5号墳例、弧線を線刻した栃木県絹4号墳例(森田1981)などがある。さらに終末段階になるとハケ目調整のみの無文のものが主体を占め、軀手部分に結紐を表現しただけのものがみられる。この時期の例として群馬県白石二子山古墳(東京国立博物館1983)、埼玉県生田塚埴輪窯跡群、栃木県織姫神社境内古墳(後藤1937)、水道山山頂古墳(小山市立博物館1991)などの長大化した円筒部をもつものが知られる。このように軀形埴輪は近畿地方において盾・蓋などの器財形埴輪の出現にやや遅れた4世紀末に出現し、軀本体のみを稀に埴輪で表現していたが、6世紀代になり他の武器・武具形埴輪と共に東国で急速に発展した様相が窺われる(坂1988)。

紙数の都合上細かな検討は別稿に譲るが、本古墳例は類例の少ない赤彩による幾何学文様を描いていること、円筒部があまり長くないこと、環状を呈し中空に形作られ形態、成形技法などの特徴から軀形埴輪としては古相を示しており、6世紀前半代の所産と位置づけられる。

以上のように形象埴輪の検討から本古墳の築造時期については、6世紀第2四半期後半に位置づけておきたい。この年代観は円筒埴輪の分析から導かれた年代観とも概ね符合するものと思われる。

3. まとめ

これまで述べてきたように代正寺遺跡の2基の古墳跡から出土した形象埴輪の様相は、6世紀前半代の小規模円墳における埴輪祭式の性格を復元していく上で重要な問題点を提示している。

第9号古墳跡では限定された範囲内に女子、馬などの形象埴輪を配置した状況が窺われ、壺を捧持し意須比を纏った巫女埴輪が重要な位置を占めている。破片資料からみて少なくとも2体の巫女像の樹立が想定される。

第9号古墳跡に後続して築造された第15号古墳跡では、人物、馬、大刀、鞍などの豊富な形象埴輪が、西側に設置されたブリッジ部から周溝北側を中心に配置されていた状況が復元された。また第9号古墳跡と比較すると形象埴輪の数量、種類が大きく変容し、形象埴輪展開期の様相を示している。とりわけ大刀、鞍、盾（鞆）などの武器・武具を表象した器財形埴輪の主体的な存在が大きな特徴として注目される。

(大谷 徹)

註

- (1) 間壁葎子氏は、畿内の女性人物埴輪は初現期から神の妻としての象徴的な面が強く意識されているが、東国などに伝播した時は伝承伝達者として、さまざまな姿態を表し葬送の場で一つの儀式やストーリーを表現する埴輪像に大きく変化していると指摘している（間壁1990）。また畿内の巫女像は右肩から左脇にかけて幅広の布を廻した意須比を纏い、肩から背にかけて褌を掛け背で十字に廻し、腰紐はゆっくりと前で結んで垂らした様式的な表現を示しているのに対して、東国の巫女像は祭服の表現を省略したものや意須比の表現も袈裟のような簡略化されたものが多くバラエティーがみられる。
- (2) 最近、昭和48年に稲荷山古墳の西側中堤に設けられた造り出し付近から出土した壺を両手で捧げ持つ人物埴輪の腕の破片が紹介された（若松1991）。これによって関東地方における人物埴輪の出現期に遡って巫女特有の姿態を表現した女性埴輪が急速く登場していたことが明らかとなった。
- (3) 埼玉県行田市瓦塚古墳（若松1986）、群馬県太田市成塚石塚遺跡（中山1991）などの報告書で形象埴輪群の意欲的な配置復元が行われている。
- (4) 高橋克壽氏によれば、器財形埴輪は墳頂部に樹て並べられ被葬者の眠る墳頂の聖域を守護するために4世紀後半に誕生したが、葬送観念や死生観の変容に伴い6世紀前半代には墳丘の低位置に樹立されるようになってきている（高橋1988）。また橋本博文氏も関東地方の形象埴輪群配置の検討から同様の見解を指摘している（橋本1980）。本古墳の場合は原位置の判明するものがないため明確ではないが、大刀、鞍などの器財形埴輪は人物や馬などの形象埴輪と共に樹立されていた可能性が強い。
- (5) 群馬県内出土の馬形埴輪を中心として製作技法を検討した稲村繁氏は、脚部の成形技法には「粘土板円筒化成形」と「粘土紐巻き上げ成形」の二者がみられるとしている（稲村1986）。県内では県北部の児玉地域に「粘土板円筒成形」によって作られた馬形埴輪が確認されているほか、鴻巣市生田塚埴輪窯跡群、及び生田塚埴輪窯群から埴輪の供給を受けた騎西町小沼耕地1号墳などで「粘土板円筒成形」によって製作された馬形埴輪や動物埴輪が出土している（田中1991）。

引用・参考文献

- 相川龍雄 1931 「鞍の埴輪 一埴輪の研究（10）一」『上毛及び上毛人』第183号
飯塚武司 1981 「形象埴輪考」『生田塚遺跡』鴻巣市遺跡調査会報告書第2集
飯塚武司 1984 「北武蔵における埴輪生産の展開」『法政考古学』第9集
稲村 繁 1986 「群馬県における馬形埴輪の変遷—上芝古墳出土品を中心として—」『MUSEUM』425号
伊野近富 1990 「塩谷5号墳出土の人物埴輪」『京都府遺跡調査概報』第38冊
今津節生 1988 『東国のはにわ』福島県立博物館
梅澤重昭 1981 「恵下古墳」『群馬県史』資料編3
大野嶺夫・大野左千夫 1978 「背見山古墳発掘調査概報」『古代学研究』85号
小山市立博物館 1991 「飛び道具—狩猟弓から武器弓へ—」

- 金井塚良一編 1976 『北武蔵考古学資料図鑑』
- 鹿野吉則 1987 「大和における馬具の様相—鉄製楕円形鏡板付轡を中心に—」『考古学と地域文化』
- 亀井正道 1977 「踊る埴輪出土の古墳とその遺物」『MUSEUM』310号
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990 『京都古代との出会い』
- 鴻巣市 1989 『鴻巣市史 資料編1 考古』
- 小島純一 1985 『西原古墳群』群馬県勢多郡粕川村教育委員会
- 後藤守一 1937 『足利市織姫神社境内古墳発掘調査報告』
- 後藤守一 1942 「所謂袈裟衣着用埴輪について」『日本古代文化研究』
- 小林行雄 1959 「とも 軀」水野清一・小林行雄編『図解考古学辞典』東京創元社
- 小淵良樹 1980 『広木大町古墳群』埼玉県遺跡調査会報告第40集
- 斎藤忠・川上博義 1974 「不二内古墳」『茨城県史料』考古資料編古墳時代
- 斎藤忠・柳田敏司 1980 『埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会
- さきたま資料館 1990 『古墳の年代をはかる—須恵器—』展示解説書
- 塩野 博 1977 「埼玉県南埼玉郡菖蒲町下栢間所在天王山塚古墳について」『埼玉考古』第16号
- 静岡大学人文学部考古学研究室 1989 『第17回 考古展 遠江地方の古墳文化の—様相』
- 鈴木敏則 1985 「静岡県の形象埴輪」第17回埋蔵文化財研究会『形象埴輪の出土状況』資料編
- 関 義則・宮代英一 1987 「県内出土の古墳時代の馬具」『埼玉県立博物館紀要』第14号
- 高橋克壽 1988 「器財埴輪の編年と古墳祭祀」『史料』第71巻第2号
- 伊達宗泰 1966 『勢野茶臼山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第23冊
- 田中正夫 1991 『小沼耕地遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第100集
- 土井珠美・根鈴知津子 1987 「長瀬高浜遺跡の埴輪」『季刊考古学』第20号
- 東京国立博物館 1983 『東京国立博物館図版目録』古墳遺物編（関東II）
- 東京国立博物館 1986 『東京国立博物館図版目録』古墳遺物編（関東III）
- 外山和夫 1972 『富岡5号墳』群馬県立博物館研究報告第7集
- 中沢貞治 1978 『高山遺跡、天ヶ堤遺跡、天野沼遺跡、下書上遺跡』伊勢崎市教育委員会
- 中島洋一 1988 『酒巻古墳群』行田市文化財調査報告書第20集
- 中島洋一 1989 『酒巻15号墳・稲荷通遺跡』行田市文化財調査報告書第21集
- 中山茂樹 1991 『成塚石橋遺跡II』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 野上丈助 1982 『大阪府の埴輪』大阪府立泉北考古資料館
- 野中徹・溝口靖 1979 『お糸塚古墳遺構確認調査報告』東洋大学考古学研究会発掘調査報告第2集
- 橋本博文 1980 「埴輪祭式論」『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会
- 埴静夫・屋代方子 1967 『千ヶ窪古墳』
- 坂 靖 1988 「埴輪文化の特質とその意義」『橿原考古学研究論集』第8
- 福島武雄 1932 「八幡塚古墳」『群馬県史跡名勝天然記念物調査報告』第2輯
- 福嶋慶純 1982 『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書IV（埴輪編）』鳥取県教育文化財団
- 間壁霞子 1990 「女性人物埴輪出現の背景」『神戸女子大紀要』24L巻（文学部篇）
- 水村孝行 1982 『桜山窯跡群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第7集
- 村田健二 1984 『古凍根岸裏』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第37集
- 森田久男 1981 「絹古墳群」『小山市史』史料編原始古代
- 八木英三郎 1895 「下野国下都賀郡羽生田ノ古墳」『東京人類学会雑誌』116号
- 八木英三郎 1899 「下野国河内郡長岡の古墳」『東京人類学会雑誌』155号
- 梁木 誠 1985 『稲荷古墳群』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第17集
- 山崎義夫 1984 『天王壇古墳』本宮町文化財調査報告書第8集
- 若松良一 1986 『瓦塚古墳』埼玉県教育委員会
- 若松良一 1988 『はにわ人の世界』埼玉県立さきたま資料館
- 若松良一 1991 「さきたまのヴィーナス」『さきたま』No. 3 埼玉県立さきたま資料館